



児童文学連続講座

平成 19 年 10 月 15 日(月)～17 日(水)
国際子ども図書館主催の「児童文学連続講座
- 国際子ども図書館所蔵資料を使って -」が
開催されました。この講座は図書館等で
児童サービスに関わる職員を対象に平成 16
年度より毎年開催されています。

今年は「絵本の愉しみ アメリカ絵本の展開」
の総合テーマで吉田新一氏の監修のもと、
小沼里子氏、三宅興子氏、灰島かり氏、
藤本朝巳氏らによる充実した内容で時代
順に展開されました。

また、国際子ども図書館職員ホームページ
からの参考図書の紹介や、児童資料や事業
についての説明等もありました。

(2 ページ目にて、講座の一部を紹介します。)

児童図書館員養成講座

日本図書館協会主催の「児童図書館員養成
講座」が今年度も開催されました。前期が
平成 19 年 6 月 25 日(月)～30 日(土)まで、
後期は 9 月 22 日(月)～30 日(日)までと、
計 15 日に及ぶ講座です。

内容は、前期に「児童奉仕の運営・年間計
画」、「障害のある子どもたちへのサー
ビス」など、児童サービスの総論的な部分
を、後期に「児童資料」、「児童サー
ビスの実際」として、「日本の児童文学」
、「レファレンス」など、各論的な部分
を学びました。

全国から 21 名の児童図書館員が参加し、
講義を聞くほか、討議や実技、あるいは
情報交換も交えた、実践的な講座内容
となりました。

(3 ページ目にて、講座の一部を紹介します。)

子ども図書研究室のテーマ展示 ただいま展示中です！

チョコレートの本 (1月16日まで)

タンポポの本 (1月17日から)

子ども図書研究室講座

「ミニブックトークからはじめよう！

15 分間で本を紹介する」関連資料
第 19 回読書感想画中央コンクール指定図書
新着図書も常時展示中です。

イベント情報 その1

袋井市立浅羽図書館 手あそびの実戦

講師：久保節子氏(常葉学園短期大学非常勤講師)

日時：平成 20 年 2 月 2 日(土) 13:30～16:30

会場：静岡県袋井市浅名 976-1

袋井市立浅羽図書館 2 階視聴覚室

対象：50 名、保護者・読み聞かせボランティア

内容：手あそび(わらべ唄など)の実戦

手あそびなどによるおはなし会の構成

申込：袋井市立浅羽図書館(0538-23-6801)

イベント情報 その2

浜松市立中央図書館 子ども読書講演会

講師：中村^{まさこ}榎子氏(青山学院女子短期大学講師)

演題：「幼児期における絵本の大切さ」

日時：平成 20 年 2 月 2 日(土) 13:30～15:30

場所：静岡県浜松市中区松城町 214-21

浜松市立中央図書館 2 階会議室

定員：150 名(先着順)

申込：平成 20 年 1 月 15 日(火) 10:00 より

電話または直接浜松市立中央図書館へ

問合せ：浜松市立中央図書館(053-456-0234)

イベント情報 その3

浜松市立浜北図書館 講演会

講師：脇^{あきこ}明子氏(ノートルダム清心女子大学教授)

演題：「読む力は生きる力」

日時：平成 20 年 3 月 15 日(土) 14:00～16:00

会場：静岡県浜北市貴布祢 3000

なゆた・浜北 3 階大会議室

定員：200 名(先着順)

申込：平成 20 年 2 月 15 日(金) 10:00 より

電話または直接浜松市浜北図書館へ

問合せ：浜松市立浜北図書館(053-586-8200)

今年度の講座は、アメリカ絵本について「草創期」「開花期」「発展期」「最盛期」の時代順に分けて解説されました。このうち「草創期」「開花期」と「最盛期」の講義を紹介します。

草創期(ワンダ・ガァグ以前)・開花期(第二次世界大戦末まで)・最盛期(モーリス・センダック その1)

(講師:吉田新一氏 国立国会図書館客員調査員)

草創期は、移住した人々がそれぞれの文化を背負って活躍した時代でした。絵は挿絵扱いでしたが、見開きの使い方や編集に個性が多く見られます。まだ大人向きのものが多かったこの時代に、幼年には幼年にふさわしい絵本を、との考えで登場した絵本に『けしつぶクッキー』(マージェリー・クラーク/作)があります。

開花期は、文字の存在がエモーションを高めた『アンディとらいおん』(ドーハーティー/作)、奥行ある構図やリフレインで親しまれた『100まんびきのねこ』(ワンダ・ガァグ/作)等の刊行後、アメリカらしい絵本が続々登場しました。

最盛期(モーリス・センダック その1)に、センダックは、名編集者ノード・ストローム女史に見出されました。アメリカでは、多くの有名な女性編集者が作家を見出し育てています。

当時は、先人の画家の絵と技法を学んで挿絵に応用する“パスティーシュ”の時代でした。『かいじゅうたちのいるところ』は、『まよなかのだいどころ』や『まどのそとのそのまたむこう』とあわせて三部作とされますが、これらはみな、主人公がファンタジーを生み出し、解決に至る成長の物語です。

最盛期(モーリス・センダック その2)

(講師:灰島かり氏 翻訳家)

センダックの絵本は、評価や好みは激しく分かれますが、見るものに陶酔感を与え、深層心

理に触れるような心地良さがあります。

『かいじゅうたちのいるところ』では、表紙に主人公マックスの姿がありません。主人公不在の表紙は、内容がマックスの心の旅であり、表紙そのものがマックスの内奥の姿であることを語ります。絵の展開は道路工事と同じ“うがつリズム”の三拍子で、ページが進むに従いクレッシェンドで読者の心奥へ切り込んでいきます。また、牛に似た怪獣のみが人間の足をしており、父親のようにマックスの成長を見守り、肩車をし、いさめる表情をしているのは興味深いことです。あるいは、マックスと対称の構図に位置し、またマックスが理性を取り戻したときに怪獣が目を閉じているのは、ユング心理学というマックス自身の「シャドウ」かもしれません。「かいじゅう」の原語は“wild things”で、センダックは「大きな、コントロールできないものたち」を考えています。マックスが部屋へ戻ると、部屋の色が寒色から暖色に、三日月が満月に描かれているのは、ファンタジーの世界を十分満喫してきたことの充足感を、また窓枠が月を閉じ込めているのは、“wild things”は現実では封じ込めておくべきものであることを象徴しています。この絵本は発刊時に「子どもたちをおびえさせる」と非難もありましたが、コールデコット賞を受賞しました。

所蔵資料から

研究書 『国際子ども図書館児童文学連続講座講義録』



平成18年度 絵本の愉しみ - イギリス絵本の伝統に学ぶ -
国立国会図書館国際子ども図書館 / 編集・発行
2007年10月

昨年の国際子ども図書館児童文学連続講座の講義録。各講師のレジュメや紹介資料リストも収録され、講義内容が生の臨場感をもって伝わってくる。また過去の講座についてはすべて翌年に冊子として刊行されている。なお、本誌のPDF版は国際子ども図書館のWebページで見ることができる(<http://www.kodomo.go.jp/>) (宮崎)

児童図書館員養成講座 「科学の本と科学あそび」報告

後期の「児童資料3 科学の本と科学あそび」では、各受講生の勤務する図書館の所蔵資料の中から「たんぼぼ」に関する本をリストアップし、内容をまとめ、AからEの五段階で評価するという事前課題が与えられました。

講師の塚原博氏は、埼玉県立熊谷、与野市、保谷市の各図書館で司書として勤務の後、ワシントン大学大学院を経て、現在は実践女子大学にて図書館学研究・教育を行っておられます。

始めに、「科学の本に対する児童司書の役割」として、1. 楽しい、美しい、質の高い科学読物の存在を知ること、2. 自然の美しさ、科学のおもしろさを本によって子どもに伝えること、3. 科学あそび、よみきかせ、ブックトークなどによって科学の本と子どもを結びつけること、を挙げられました。次いで、科学読物の歴史や評価の基準などについて触れた後、評価する力をつけるためには、1. 多くの科学読物を味わってみる、2. 子どもや専門家の意見をきく、3. 自然観察や実験をする、4. 同じ著者の科学読物を読む、5. 同じテーマの本を続けて読み、読み比べをする、6. 科学読物の研究書を読む、7. 一般書を読み、比較検討する、8. 書評を書く、と述べられました。

その後、受講生がリストアップした「たんぼぼ」に関する本を1冊ずつ見ていきました。ここでは、当館に所蔵する資料を中心に、講師や受講生の評価を添えて紹介します。

『たんぼぼ』(平山和子/ぶん・え 北村四郎/監修 福音館書店 1972): 根の表現に注目したい。個体差にも触れている。240という花の数を、幼児にも目で見て分かるように描いている。問いかけで始まり、問いかけで終わるのは、興味を引き付け、本だけで終わらせない効果がある。< A >

『たんぼぼさいた』(小川潔/ぶん 加藤新/え 新日本出版社 1979): 絵が弱い。綿毛から発芽する数、都市化とたんぼぼなどについての記述に独自性があり、捨てがたいが、出来はよくない。< B から C >

『たんぼぼ』(甲斐信枝/作・絵 金の星社 1984): ニホンタンポポについての本。テキストは叙情的であり、「おそろおそろ」など、著者の主観が含まれる。ラストの記述が若干不正確である。< B >

『つよいぞ! セイヨウタンポポ』(おくやまひさし/ぶん・え 大日本図書 1995): 会話体。一応ポイントは押さえて書いてあるが、時に話題が飛ぶことがある。< B から D >

『タンポポ観察事典』(小田英智/構成・文久保秀一/写真 偕成社 1996) 受講生のほぼ全員がAランクの評価を付けた、大人受けする本である。< A >

最後に、図書館で行う科学あそびについて、子どもと科学読物を結びつけるのが目的であり、児童館や科学館等で行う科学あそびとは目的が異なること、また、身近な材料で、いつも子どもと接している図書館員が本につなげることに意義があることを述べられ、実際に科学あそびを実演していただきました。

所蔵資料から

研究書 『センス・オブ・ワンダー』



レイチェル・カーソン / (著)

上遠 恵子 / 訳

新潮社

1996年7月

『沈黙の春』で環境汚染を告発した、海洋生物学者である著者による遺作。表題は「神秘さや不思議さに目を見はる感性」のこと。子どもたちに生まれつき備わるこの感性を保ち続けるには、感動を分かち合う大人がそばにいる必要があると語りかける。佑学社1991年刊の再刊。

* 本資料は閲覧室にあります(404/カソ)

(鈴木由)

新着資料から

絵本 『わすれんぼうのねこモグ』



ジュディス・カー / 作
斎藤 倫子 / 訳
あすなる書房
2007年10月

モグはトーマス家のねこ。気立てはいいのだが、うっかり屋さんで忘れんぼう。そんなつもりはないのにトラブルを起こして家族に怒られ、とうとう唯一の味方、デビーを泣かせてしまった。数々の失敗も、やさしさや、面白そうなことや楽しいことに夢中になってしまうから。そんなモグはまるで子どものよう。でも、ある事件がきっかけで家族から見直され、自慢のねこに。

最後、家族の中に居場所を見つけることができたモグに読者もホッとするだろう。【4～5歳から】 (牧田)

知識 『今日からは、あなたの盲導犬』



日野 多香子 / 文
増田 勝正 / 写真
岩崎書店
2007年10月

アイメイト協会の盲導犬歩行指導員が1000頭目の盲導犬「セロシア」を目の不自由な人に手渡すまでを、写真とふりがなつきの文で追った記録。多くの人たちの愛情を受けて育った犬は、やがて盲導犬になるための厳しい訓練を受ける。視覚障害者の新しい主人とともに4週間の合宿訓練を経た後、卒業試験で銀座の雑踏へ出る場面では、つい指導員と同じ気持ちで写真と文を読み進めてしまう。

犬と人間の視野の違いや、盲導犬を得た女性の希望に満ちた手紙も、盲導犬への理解を深める1冊。【小学校低学年から】 (宮崎)

物語 『お皿のボタン』



たかどの ほうこ / 作・絵
偕成社
2007年11月

一番いばっている「ホワイト夫人」。「船長」という名の金ボタン。小さな四つ穴ボタンの「末っ子同盟」。高橋家の飾り棚の上に置かれたお皿には様々なボタンが(時々はボタンでないものも)入っている。取れたボタンを仮置きするお皿の中で、ボタンたちは束の間、あるいは長い時間をにぎやかに暮らしている。

それぞれのボタンがお皿へやって来るまでの冒険物語は、お皿の真ん中に色鮮やかに描き出され、個性豊かなボタンたちの弾むような会話とよく合って、読みやすい。『北海道新聞』連載を単行本化。【小学校低学年から】 (鈴木由)

物語 『チームふたり』



吉野 万理子 / 作
宮尾 和孝 / 絵
学習研究社
2007年10月

6年生で男子卓球部キャプテンの大地は、小学校最後の大会で、真面目だが実力不足の5年生、純とダブルスを組むことになってしまう。試合に勝ちたい大地は、編成について顧問に諭されるが、納得できない。その最中、家庭で事件がおきて気落ちした大地は、純とうまく接することができず自己嫌悪に陥る。しかし、事件を通じ家族から「チーム」について学んだ大地は、純を助けながら大会に臨む決意をする。

様々な事件で揺れ動く少年の心の葛藤を通し、先輩、家族の一員として悩み成長する様を前向きに書いている。【小学校中学年から】(渡辺勝)